

## 追手門学院大学生の「笑い」に関する調査・中間報告

笑学研究所所長 高垣 伸博

笑学研究所の目指すべき姿は『教育・文化のグローバル化に対応できるコミュニケーション力を備えた人材育成のための笑いとの融合をめざした、総合的な学術研究所』であり、また、設立方針の中に「笑いを活用した教育プログラムの研究」がある。今年度春学期に開講した「笑学入門」はその一環と言える。(2017年度春学期も開講)

この「笑学入門」の講師は研究所関係者だけではなく、外部からも招聘してオムニバス形式で行った。因みに今年度の外部講師として桂かい枝氏(落語家)、大池晶氏(漫才作家、NHK生活笑百科構成)、小佐田定雄氏(落語作家、NHK上方落語の会司会)、和栗隆史氏(大阪府立金岡高等学校長、放送作家)といった方々にご登壇いただいた。

この授業の目的は学生が「笑い」への理解を深め、その必要性、効用を学びとり、それらを日常に取り込み、コミュニケーション力向上の一助にすることである。当然15回の講義で充分であるはずもなく、今後も試行錯誤続けながら、「笑い」を理解しやすく取り込みやすい、より充実した内容にすべく改善を重ね、ひいては「笑いを活用した教育プログラム」の開発に繋がるよう研究してゆくことは言うまでもない。

その足掛かりとして追手門学院大学生を対象に「笑い」に関する意識調査(紙回答によるアンケート 図1参照)を実施したのである。

そもそも学生が「笑い」に対してどの程度関心があり、「笑い」というものをどうとらえているのかを把握することは「笑いを活用した教育プログラム」の開発には必要不可欠である。

学生を対象とした「笑い」に関する意識調査を扱った先行研究はいくつかおこなわれておる。例えば『現代の若者の「笑い」に関する実態とその課題』(青砥弘幸:日本笑い学会論文・笑い学研究22)や「笑い」を「ユーモア」と読み替えて調査したものもあり(「ユーモアの心理学」上野行良著 サイエンス社2003)、「笑い」と一言で言ってもその捉え方は広範である。

「笑い」という現象。その誘因は様々であり、それらによる結果としての「笑い」は『正の「笑い』』から負の「笑い」まで様々である。ここで言う『正の「笑い』』とは、「爆笑」や「哄笑」と表現される楽しく心地よい笑いの類を指しており、『負の「笑い』』とは「嘲笑」や「失笑」などを指すと理解していただきたい。

今回は『正の「笑い』』に関する調査を行った。また、その笑いを「コミュニケーションと笑い」



「演芸と笑い」「言葉と笑い」の3つの観点から調査することにした。

実施期間：2016年9月～11月

調査対象：追手門学院大学生 482人（男性238人 女性228人 性別無回答16人）

対象学年：1～4年

この調査結果の詳しい分析については別の機会に報告することにし、本稿では中間報告としていくつかの興味深い結果について述べてゆくが、本文表記で特に説明の無い場合、基本的に5段階回答の4、5の回答を合わせて「当てはまる」、1、2の回答を合わせて「当てはまらない」と理解していただきたい。また3の回答を高群に含めて「どちらかと言えば当てはまる」と表現する場合もあることを断っておく。

前出のアンケートの設問を見ていただいたらわかる通り、最初に「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」「Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか?」を並べた。これは「コミュニケーションと笑い」の観点、つまり「喋る」=「コミュニケーション」と捉え、「喋る」ことと「笑いへの理解や関心」（笑う、笑わせる、笑わせたい）の係性を明らかにしようという目的からである。

また「よく喋るか否か」という習性が個体独特のものなのか、生まれ育った環境や家庭に影響するのかを確認すべく「Q4. 家族とよく喋りますか?」「Q5. 楽しい家庭ですか?」という問いかけをした。

今回はこの4つの設問に関して報告してゆくことにする。

「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」（表1）に対しては「当てはまる」が224人で全体の46.4%と半数弱を占め、「どちらかと言えば当てはまる」にすると358人と追大生の74%が「よく喋るタイプ」と自認していることがわかった。

表1 Q1. あなたはよく喋るタイプですか?

無口	1	2	3	4	5	よく喋る
	19(3.9%)	105(21.7%)	134(27.7%)	152(31.4%)	72(14.9%)	

また「Q3. 友人とはよく喋りますか?」（表2）では「当てはまる」が360人と全体の約75%を占める結果となった。これは喋る相手を「友人と」に限定したからであろう。

表2 Q3. 友人とはよく喋りますか?

喋らない	1	2	3	4	5	よく喋る
	7(1.4%)	28(5.8%)	87(18.0%)	169(34.9%)	191(39.5%)	

では「Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか?」（表3）となると、「当てはまる」に該当



するのは91人と全体の20%にも届かない。

つまり、普段友人とはよく喋っても、いざとなると人前で喋ることができないという正直な結果となった。この結果は日ごろの学生を観ていれば想像に難しくなく、残念ながら頷いてしまわざるを得ない。

表3 Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？

苦手	1	2	3	4	5	得意
	144(29.8%)	129(26.7%)	118(24.4%)	66(13.6%)	25(5.2%)	

では、家庭ではどうだろうか。

「Q4. 家族とよく喋りますか？」(表4)との問いかけに、「当てはまる」は285人、全体の約60%が家族とよく喋るという結果が出た。これは意外というか、微笑ましい結果である。

表4 Q4. 家族とよく喋りますか？

喋らない	1	2	3	4	5	よく喋る
	23(4.8%)	56(11.6%)	118(24.4%)	149(30.8%)	136(28.1%)	

これに関連して「Q5. 楽しい家庭ですか？」(表5)との質問でも、「当てはまる」が297人(61.3%)でQ4とほぼ同数であった。

表5 Q5. 楽しい家庭ですか？

そうは 思わない	1	2	3	4	5	とても楽しい 家庭だ
	23(4.7%)	53(10.9%)	110(22.7%)	170(35.1%)	127(26.2%)	

では、楽しい家庭なら家族とよく喋るのか「Q4とQ5」の関係を見てみると(表6)、両方の5、つまり「とても楽しい家庭で家族とよく喋る」と回答したのが91人で約19%、これを「当てはまる」に広げてみると全体の約50%、246人が楽しい家庭で家族と喋よく喋っているということになる。

サンプル数が500人にも満たないので一概には喜べないが、この結果は特筆すべきことではないだろうか。



表6 縦軸「Q4. 家族とよく喋りますか?」横軸「Q5. 楽しい家庭ですか?」

	全体	1. そうは 思わない	2	3	4	5. とても 楽しい家庭だ
1. 喋らない	23	9	12	1	1	0
2	56	9	15	20	10	2
3	118	2	19	61	30	6
4	149	3	6	20	93	27
5. よく喋る	136	0	1	8	35	91

因みに「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」と「Q4. 家族とよく喋りますか?」の関係はどうなのか。(表7)

表7 縦軸「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」横軸「Q4. 家族とよく喋りますか?」

	全体	1. 喋らない	2	3	4	5. よく喋る
1. 無口	19	8	4	4	0	3
2	105	4	19	30	41	11
3	134	4	12	48	44	26
4	152	3	18	26	48	57
5. よく喋る	72	4	3	10	16	39

「よく喋る」タイプと答えた72人のうち「家族とよく喋る」のは39人、Q1、Q4両方の「当てはまる」を合わせると160人で全体の33%である。つまり追大生の約30%が家族ともよく喋り、自称「喋り」である。この結果をどう見るかは読者にお任せするが、「どちらかと言えば」まで含むと314人、約65%の学生が「家族とよくしゃべり」自称「喋り」の傾向にあると言える。

では「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」と「Q5. 楽しい家庭ですか?」(表8)の場合はどうかと言うと、「よく喋る」と答えた72人のうち「とても楽しい家庭だ」と答えたのは39人で、両方の「当てはまる」を合わせると162人(約33%)、つまり約30%の「よく喋る」学生は「家族とよく喋り楽しい家庭」と認識しているのである。と言うことは「楽しい家庭」で「家族とよく喋る」学生は「よく喋る」ようになる、と結論付けるのは早計だろうか。

表8 縦軸「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」横軸「Q5. 楽しい家庭ですか?」

	全体	1. そうは 思わない	2	3	4	5. とても 楽しい家庭だ
1. 無口	19	8	2	3	3	3
2	105	3	19	27	39	17
3	133	0	12	50	48	23
4	152	8	13	22	65	44
5. よく喋る	72	4	7	8	14	39



最後に「Q 24. なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？」好きか嫌いか（表 9）の結果を示すことにする。

482 人の出身を大阪府下（244 人）とそれ以外（222 人）で比べると、一体どんな結果になるのか（出身地未回答 16 人）、結果は表 9 の通りである。

表 9 Q 24. なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？

嫌い	1	2	3	4	5	大好き
大阪府下	9(3.6%)	25(9.9%)	70(27.8%)	67(26.6%)	80(31.7%)	
大阪府外	12(5.2%)	28(12.1%)	57(24.6%)	77(33.2%)	54(23.3%)	

ではこの詳細を見ていただく。表 10

表 10 ※愛知県以下 50 音順

	大阪人気質						
	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
大阪府		9	25	70	67	80	
兵庫県		2	12	20	28	20	
京都府		3	7	11	14	11	
奈良県		1	1	3	8	4	
和歌山県			1	2	3	1	
滋賀県		3	3	8	12	10	
愛知県				1	1	1	
愛媛県		1		1		1	
茨城県						1	
岡山県					2		
沖縄県		1		1			
熊本県			1				
広島県				2	1	2	
香川県					2		
佐賀県				1			
滋賀道			1				
鹿児島県				1			
静岡県					1		
石川県		1					
千葉県				1			
長野県						1	



鳥取県			1		
東京都				1	1
徳島県				1	
福井県		1			
福岡県				1	
北海道			1		

この結果は本学の学生（回答者）の出身地分布によるものであるもので、あまり参考にはならないが、付録として楽しんでいただければ幸いである。

以上、本稿はあくまでも中間報告であることを重ねて断っておく。

今回の設問自体まだまだ検討の余地のあるものが多く、今後さらなる調査研究を重ねることで、近い将来「笑いを活用した教育プログラム」の開発に繋がることを信じて報告を終えることにする。

